

一流女子剣道選手の試合に関する分析的研究

指導教員 巽 申直
発表者 船橋 里乃

キーワード：女子剣道、全日本女子剣道選手権、打突の機会、有効打突部位

1. 緒言

剣道の試合では、試合・審判規則に基づいた有効打突を競うため、競技者は、いかに有効打突を得るかということに常に念頭に置き、日々稽古しているといっても過言ではない。そして、競技力向上を図るために、上級者、一流選手及び超一流選手の試合特性を参考にして工夫していると思われる。

一流選手の試合に関する先行研究をみると、恵土ら（1998）は、剣道の最高峰である全日本剣道選手権大会で数度の優勝経験を持つ選手としばしば同大会に出場する選手を対象にした試合を分析し、超一流選手の発現打突時間の短いことを報告している。また、恵土ら（1983）は、一流選手の発現した技とその攻め方についても報告している。しかし、これらの報告からはかなりの時間が経過しており、且つ、近年の競技者の防御技能が顕著に向上し、1本勝ちの試合や延長戦による試合が増えていることから、現在の試合技能には大きな変化が生じていることが推測される。一方、これまでの試合分析は男子選手を主にしたものが多く、女子選手を対象にしたものは数少ない。そこで、本研究では、これからの女子の稽古法の工夫や試合技能を高める為の1資料を得るために、試合における有効打突の打突部位の動向調査及び一流女子選手の有効打突時の動作局面に着目して、どのような動きが有効打突取得に関与しているかを明らかにすることを試みた。

2. 研究方法

2-1 有効打突の打突部位及び3本勝負の調査

試合中に発現された有効打突の打突部位は、月刊剣道日本（スキージャーナル社）に掲載された以下の試合記録から分類をした。なお、3本勝負の勝敗の内訳（2本勝ち：以下2:0、勝負：以下2:1、1本勝ち：以下1:0）の対象は、1)と2)の大会とした。

- 1) 第49回～第53回全日本女子剣道選手権大会の有効打突数 401本
- 2) 第58回～第62回全日本剣道選手権大会の有効打突数 384本
- 3) 第44回～第48回全日本女子学生剣道選手権大会の有効打突数 500本
- 4) 第58回～第62回全日本学生剣道選手権大会の有効打突数 974本
- 5) 第57回～第61回全国高等学校剣道大会女子個人戦の有効打突数 615本
- 6) 第57回～第61回全国高等学校剣道大会男子個人戦の有効打突数 608本
- 7) 第40回～第44回全国中学校剣道大会女子個人戦の有効打突数 615本
- 8) 第40回～第44回全国中学校剣道大会男子個人戦の有効打突数 626本

2-2 一流女子剣道選手の動作分析

スキージャーナル社の所蔵する過去5年間（第49回～第53回）の全日本女子剣道選手権大会（193試合）のDVDを画像反復再生法により、以下の動作項目を分析した。

- 1) 初太刀の技（面、小手、胴、突き）

- 2) 有効打突時の動作（一撃、連打、体当たり）
- 3) 有効打突時の体さばき（前進、後退）
- 4) 有効打突の機会
（ア、相手の動作の起こりがしらい、技を受け止めたところ（連続技など）ウ、技の尽きたところ（応じ技など）エ、居付いたところオ、引くところカ、鏝競り合い・体当たり）

3. 結果と考察

3-1 最近5カ年の各大会における有効打突の打突部位

一流女子選手における有効打突の打突部位の特性を明らかにするために、最近5カ年の全国中学校大会から全日本選手大会に至る有効打突の打突部位の割合と比較したものを図1に示した。全日本女子選手権の有効打突部位は、面65.6%、小手24.7%、胴7.0%、突き2.5%の順であり、面の割合が顕著に高かった。しかしながら、男女どの年代やレベルの大会において、最も高い割合を示した有効打突の部位は、全日本男子の48.0%を除けば、60%以上が面であることから、試合中の決まり技は顕著に面部位であることが分かった。次に高い割合の部位は小手であり、全日本男子の37.0%から中学男女の15.0%の範囲にあった。この調査から、いずれのレベルの大会においても有効打突の部位はメン、コテ、ドウ、ツキの順であることが理解された。この原因は、剣道の攻め方が縦方向の動きに深く関連していると考えられる。縦方向の動きとは、体の正中線（矢状面）を重視することであり、剣先を体の中心から外さないことによってどの技を打つ際でも相手に対して最短距離で打突でき、一方、相手が技を出してきたときは弾くことによって打たれず、また、縦の軌道が少々大きくなっても相打ちには強いと考えられる。即ち、剣先の横方向への動き（水平面）が大きくなればなるほど打ち込まれやすく、防御はできたとしても瞬時に応じることは困難になると考えられる。したがって、剣先で常に中心を取ることが攻防の中で大切な技能であり、有効打突を得ることに深く関与しているものと考えられる。また、正中線上に位置するのが、面、小手の部位であるが、小手部位は竹刀を保持しているために面部位に比べ正中線上から動き易くなることによる的中率が低下することや相手に防がれ易いことなどの要因によって、面の打突部位の方が有効打突の割合を高くしているものと推察される。

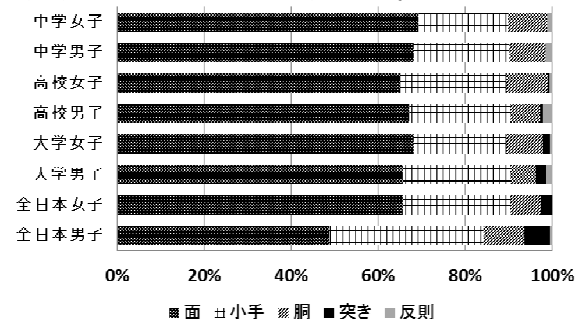


図1 各大会における有効打突部位の割合

3-2 3本勝負の内訳

全日本女子選手権における3本勝負の内訳をみると、2対0の割合は13.0%、2対1が7.8%、1対0が79.2%であり、1本勝ちの試合が圧倒的に多い傾向にあった。全日本選手権男子では、2対0の割合は9.4%、2対1が11.4%、1対0が79.2%であった。男女に関係なく最高レベルの選手権大会では、3本勝負の勝敗の決定は1本勝ちの場合が顕著に高いことが分かった。これは、選手の競技力が益々向上し均衡する傾向を示しており、また、こうした傾向は今後更に助長されるものと考えられる。

3-3 一流女子剣道選手の有効打突時の動作

有効打突247本中、瞬時に打つ、所謂、一撃の動作からの割合は75.5%であり、続いて、連打からの13.3%、体当たりからの11.2%であった、一撃の動作からの有効打突の取得は、即ち、攻め合いから瞬時に有効打突を決めていることであり、技能レベルが高いと、瞬時に打突できる姿勢や相手の動きをよみとれる技能を身につけていることが要因と考えられる。一流選手ほど、中心をとる攻め方をしていくことから、試合技能を高めるためには、剣先を利かせた「攻め」を理解し、習得していくことが稽古の課題となること示唆される。

また、連打と体当たりからの有効打突の取得の割合については、近年、競技者の防御技能が顕著に向上していることから、単発な打ちでは崩せないところを2本、3本と連続して技を出したり、体当たりによって相手の構えを崩すことによって有効打突を取る動作が増加しているのではないかと想定した。しかしながら、実際にはいずれも全体の10%程度と比較的低い割合であった。この理由としては、打ち合いや体当たりからの有効打突は、取ることもできるが取られるリスクも多くなることから、一流選手になるほどリスクを避け、一撃で攻め勝ち戦術を選択しているものと推察される。

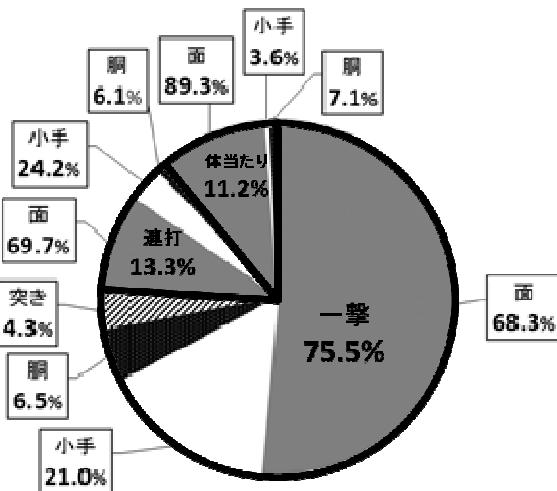


図2 有効打突の打突部位と打ち方の割合

3-4 有効打突時の体さばき

有効打突時の一流選手の体さばきを前後動作の割合でみると、前進動作が78.9%であり、後退動作が21.1%であった。前進動作による体さばきからの有効打突の取得が顕著に高いことが分かった。これは、竹刀剣道の特徴は踏み込み動作による打突であることと剣道技の多くが前方でさばくものがほとんどあることなどが起因しているものと考えられる。一流選手の有効打突時の体さばきが前進動作に顕著であることから、稽古では、効率的な前進動作をより向上させる取り組みが必要と思われる。

3-5 有効打突の機会

試合中、有効打突をどのような機会に捉えたかを分析した結果を図3に示した。相手の動作の起こり頭が35.6%、技を受け止めた所20.7%、技の尽きた所18.6%、鏝競り合い・体当たりかの所13.4%、居ついた所10.1%、引く所1.6%の順であった。起こりの機会は、相手が攻めに出る所、技を出す所または出そうとする起こり頭を素早く打突する所であり、間合を詰めた瞬間や打突のために手元が上がった瞬間などに技が出現するが、相手の動きを事前に察知しないと出遅れて失敗し、逆に打ち込まれてしまう。そのため、相手の心理、剣先の働きのよみ、体さばき、打突スピードやリズムなどを十分に察知する技能が求められる。一流選手は、こうした相手の心理や動きのよみに優れていることや瞬時的な打突を可能にする打ち方や体力を有しているものと考えられる。

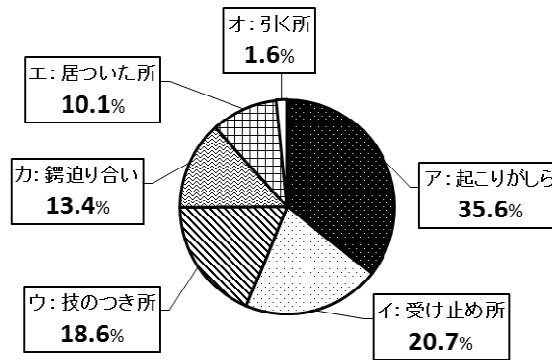


図3 有効打突の機会の割合

4. まとめ

一流女子剣道選手の試合技能を明らかにする目的で最近5カ年の全日本女子剣道選手権大会を分析した結果、次のような知見が得られた。

- 1) 最近5カ年の各種大会における試合の有効打突部位は、殆ど60%以上が面部を示していた。
- 2) 一流女子選手の試合では、1本勝ちの勝敗が79.2%であり、一流男子選手の79.2%と同様な割合であった。
- 3) 一流女子選手の有効打突の取得は、一撃による動作から75.5%であり、また、有効打突時の体さばきは、前進動作の78.9%であった。
- 4) 有効打突の機会の割合は、相手の動作の起こり頭の35.6%が最も高かった。

以上のことから、剣道の試合技能は一撃による起こり頭の面の技に収斂されてくる傾向にあることが理解された。そして、この技の習得には相手の動きをよみ能力と瞬時に体さばきのできる姿勢、打ち方及び専門的運動能力の高め方が稽古課題になる。

5. 文献

- 1) 恵土孝吉、渡辺香、石井敬、小田佳子 (1999) : 剣道試合における分析的研究 (Ⅲ) —超一流選手の技術— 金沢大学教育学部紀要 (自然科学編) 第48号、p47-60.
- 2) 恵土孝吉、端由紀美、石井敬、渡辺香 (1983) : 剣道試合における分析的研究—一流選手の技術— 金沢大学教育学部紀要 (教育科学編) 第32号、p81-91.
- 3) 日本武道学会剣道専門分科会編 (2009) : 剣道を知る事典「打突の好機」、p72-73.